春一番が吹くまで

川西蘭

春一番が吹くまで

川西蘭

春一番が吹くまで
©1979 Ran Kawanishi

1979年11月20日初版発行
1981年4月20日5版発行

著者 川西 蘭
発行者 清水 勝
発行所 株式会社河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2
振替口座（東京）0-10802
電話 編集03-404-8611
営業03-404-1201

印刷 亨有堂印刷
製本 小高製本

落丁・乱丁本はおとりかえします。

目次

春一番が吹くまで――5
ブラック・ボックスを背負って――113

装画　味戸ケイコ

装丁　菊地信義

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

春一番が吹くまで

春一番が吹くまで

僕にはズボンのポケットに何でも入れておくという癖がある。小銭とか鍵とか定期券とかその他こまごましたものを、いっぱいポケットにつめこんでいる。ズボンを換える度に何か一つは無くしてしまうのだが、絶対に無くさないものが一つだけある。ちっぽけな金属製の鈴がそれだ。ゴツゴツと角張った鈴がポケットに入ってないと落ち着かない。別に本居宣長を気取っているわけではない。ただ、この鈴をくれた女の子や、その時は確かに彼女と僕の周りで生きていた人を忘れたくないだけだ。もういくらか前になるが、初秋の雨の中に消えていった彼女たちを僕は一生忘れることがないだろう。

そのころ僕は、小さな田舎町から近くの中都市にある高校に通う高校生だった。僕の通っていた高校には、真面目一筋の奴とそうじゃない奴が半々くらいいた。もちろん（と言うべきだろうな、やっぱり）僕は後者の方で、勉強ばかりやってる奴らはどんな神経をしているんだろう……神経の一本一本が針金で出来てるんじゃないかな、とかなり冷たい目で彼らを見ていた。時には、

まずいかなとは思いながらも、口に出して〝参考書とお友だち〟連中を皮肉っていた。

学校へ通う途中に乗る電車からは、ほんの少しだけど海が見えた。電車の窓を通して見る海はたとえようもなく美しいものだった。穏やかな春の日には、小さな鏡を敷きつめたように、海面を陽に輝やかせて、かなたの島々をポッと包む霞と共に、幻想的なけだるい美を見せてくれたし、風の強い冷たい冬の日には、厚い灰色の雲の下で、自然の構想した〝厳格〟という構図を寸分違えることなく見せてくれた。季節によって種類は異なっていたが、美しいという点では同じだった。こんなことを言うと笑われるかもしれないが、春、夕方の海を見るときには、特に夕焼けが赤紫色だったりするとモネの絵を思い出してしまったり、昼の海を見ると、本当に〝春の海〟の琴の音が聞こえるような気がした。内海だから荒れることがほとんどない冬の海を見れば、映画や写真でしか見たことのないドイツやスイスの湖を見ているような錯覚にとらわれてしまう。春や冬のことばかり言っているけれど、秋になると片側に海があって、反対側にみかんの橙色が深緑の葉の間から見えるという秋らしい美しさだってある。でも、いちいち言ってるときりがないから止めることにしよう。何故なら毎日毎日、海は変わっているのだから。

そんな風に、小一時間の電車通学の中で、海の見える数分間は、僕はこころの中では電車の窓に顔をくっつけるようにして、一すじの光も洩らすことのないように、一所懸命海を見ていた。つまり、こんなにはしたなく〝あからめもせで〟見てしまうこと自体、僕の通俗性を証明しているのだが、俗化された僕の目にさえ、本当に美しく海は映るのだ。でも、あからさまに海を見る

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ということは、実に恥かしいことだと思っていたから、相当気を遣って何気ない風を装うことだけはしっかりやっていたつもりだった。「学校へ行くのヤだね。あーだるい」と前にすわっている友だちを見て、本当に眠そうな顔をして見せ、〝何気なく〟窓の外に目をやる、くらいの芝居は毎日打っていた。でも、回数が多いものだから友だちには分るらしくて、時々「何の変哲もない海を見て楽しいの」とか「海見るなんてガラじゃないだろう。はたで見てても恥かしいじゃないか」とか「お前は本当に力一杯の馬鹿だなあ」とかいろいろ言われた。もっとも僕の友だちは口の悪い奴ばかりで、人が一所懸命になっていると、何やかや口に出して皮肉るのが常だったから、余り気にはしなかった。僕は友だちに何と言われようと、海を見ることを止めようとは思わなかった。波一つあるかないかで全体に流れる感じが変わるように思われる海の姿を見ることは、緊張の連続の中で、僕に与えられた一握りの休息の時だったから。

「ねえ、夏休みだけでも予備校に行ってみたら？」

母は気軽に言った。この言葉のトーンは、今でもはっきり思い出せるのだが、それは正確に、説得と少しだけど拒否を寛容するという思いやりを表わしていた。

「えっ？」

「だから、夏期講習にだけでも行ってみたら」

と母は優しく繰り返した。

「うん」

僕は、表面では平静を装っていたけど、内心は飛び上がらんばかりに喜んでいた。むろん、予備校で高度な受験技術を養うことが出来るなんてことを喜んだのではない。

〃受験にテクニックなんてない。あるのは努力だけだ〃

なんてオドケて見せる年取った講師たちに相槌打ってる暇なんてない、と意気がっていたのだから。ただ、親元からひと月近く離れて暮らすことに、何にも比べることの出来ない大きな魅力を感じた。漠然とした何かが、手を拡げて僕を待っているような気がした。それが良いものであれ、悪いものであれ、魅力的なことは確かだった。

母はそれから東京にある有名な予備校の名をあげ、なるべく早く手続きをするように、と念を押した。

手続きを春に（春と言うより、初夏と言った方がいいかもしれない。黒い学生服が重くてたまらなく感じる頃だったから）済ませて、二か月余り後に僕は上京した。額に汗をためて、両手に荷物を一杯かかえて。

予備校の授業は、僕の想像通り事務的、よく言えば合理的に進められた。授業そのものに興味はなかったけれど、一応真面目に出席だけはしていた。僕は、予備校のあるところから電車を使って片道十分くらいの町に下宿していたので、（下宿にはベッドしかついてなかったから、本や

ステレオなんかは家から送って貰ったのだ。だから、下宿は家の僕の部屋とほとんど同じようになっていた）朝早くても平気だったし、とても暑い頃だったから、冷房が完備されてる予備校はしのぎ易いという点で魅力的だというのが、真面目な出席の主な理由だった。

二十日近くある講習が半分終った日、僕は午前中の授業が済んで、午後の授業が始まるまでの時間をどう潰そうかと思い悩み、良い案が浮かばぬまま予備校の屋上に足を運んだ。いつもの生活パターン通りにやればいいじゃないかと思うかもしれないが、それまでは午前中しか授業がなくて（と言うのは、午前中に英数国の授業があって、午後から理科、社会の授業があるからだ）午後からは、真面目に自習室で勉強していたのだ。この自習室での勉強はかなり面白くて、壮絶な席取り合戦があったり、それに伴なう陰険な闇取り引きなんかもあったりして、本当に刺激的なのだ。まあ、そんな下らないけど面白いことがあるから、午後はずっと自習室にいるのも退屈しないのだが、午後の授業を待って時間を潰すという作業は、とてつもない難事業だった。

屋上に上がって日かげのベンチに腰を下ろし、日本史の教科書を出したまでは良かったけれど、えいっと適当に開いたページが、一番苦手な南北朝あたりで、後醍醐天皇、懐良親王、宗良親王、護良親王と続くうちに僕はいつの間にか、ダラシなくも眠ってしまった。

何人もの人がたてる鉄製の階段の音で眠が覚めた時は、地獄だった。いくら昼休みが充分にあると言っても、眠るには当然のことながら短くて、時計を見ると午後の授業が始まる五分位前だった。五分あれば充分だろうと思うのは間違いで、僕は歩いて数分かかる別の校舎にまで行かな

くてはならなかった。
屋上から一階まで階段六階分を一気に駆け降りて外に出た時点で、僕はもうヘトヘトだった。〝走ろう〟なんていう殊勝な考えが頭から飛び去ってしまい、やけくそで鼻歌を歌いながらのこのこと湯気が立ち上がっているようなアスファルトの坂をのぼった。
本当に暑い日だった。空は白く燃えあがり、陽射しは針のように尖っていた。寝起きの不快感とベトつく汗は、少しばかり僕の神経を苛立たせた。
校舎へ入ると冷気が心地良かったが、それもつかの間、満員のエレベーターは蒸しブロのようだった。
閉じようとしている扉をこじ開けるようにして入って来たのが、彼女だった。
彼女は僕の胸に体を預けるように飛び込んできた。ムッとする空気が、僕の体を包んだ。苛立っていた僕は、自分でも驚くほど強い調子で彼女に言ってしまった。
「エレベーターは二つあるんだから、隣のを待ってもいいじゃないか。こんな満員のに乗らなくても」
「ごめんなさい。私、急いでたから」
と彼女は小さく言って顔を上げた。
大きな、水晶のように澄んだ目と高い鼻、細かな汗の粒が印象的だった。そして、本当に申し訳なさそうな顔は、僕の苛立ちを鎮めさせるのに充分だった。

「いや、僕の方こそ怒鳴ったりして」
軟弱と批難されるべき言葉が、反射的に口から出ていた。
ハンカチで額の汗をぬぐいながら、彼女はもう一度「ごめんなさい」と繰り返し、ニッコリ笑って僕を見た。
エレベーターを降りて教室に向かったが、授業はもう既に始まっていた。この予備校は遅刻に恐ろしく厳しくて、授業に一分でも遅れると教室に入れてもらえないのだ。
ガッカリして自習室に行こうと振り返ると、そこにはさっきの女の子が、ポツンと一人立っていた。
「君も?」
彼女はうなずくと何も言わず、トボトボとエレベーターに向かって歩き始めた。肩まである黒い髪が、一歩一歩確かめるようにして歩くのに合わせてユラユラ揺れている。そんな彼女の後ろ姿は、まだ幼い少女を思わせるものだった。
「これからどうするの」
と僕は彼女に駆け寄りながら、背中越しに声をかけた。
「どうするって?」
「授業は駄目だし、自習?」
「うん」

と答えて、彼女はエレベーターの8のボタンを押した。
八階は食堂兼自習室となっている。つまり、お昼の食事時にはセルフサービスの食堂となり、あとの時間は自習室として使われているのだ。いつでも何人もの人が静かに勉強していて、ちょうど図書館の閲覧室のようだ。
彼女の横に当然のようにすわった僕は、少しの間、彼女の素敵な横顔を見つめた。黒いきれいな髪と長いまつげ、大きな目、少し甘えたような口、それぞれが他の魅力を打ち消すことなく、互いに魅力を高め合っているという本当に素敵な、魅力的な横顔だった。
筆箱とかノートとかをバッグから出していた彼女は、急につぶやくように言った。
「アイスコーヒー飲みたいな」
そして、僕の方に振り向くと、
「あなたも飲まない？」
と訊いた。
「うん、買ってくるよ」
立ち上がりかけた僕を制して、彼女はニッコリ笑った。
「オモテかウラかっていうので決めない」
「いいよ、じゃ僕はオモテ」
それじゃ、私はウラねと言いながら彼女はコインを放り上げた。クルクル回りながら落ちてき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook